

# 八重山のハーブII 「命草」 第八回 海浜ハーブ2

(テッポウユリ、ナンゴククサスギカズラ、ニイタカヨモギ、ハマゴウ、シマヤマヒハツ)

文・イラスト・写真 嵩西 洋子

前回に引き続き、八重山の海浜ハーブ第二弾です。

**テッポウユリ (リュウキュウユリ)**

*Lilium longiflorum Thunb.*

**ユリ科。** 琉球固有種。断崖の岩場などに自生。イースターリリーとしても知られ、交配親としても活躍し、たくさんの園芸種が作出されている。根(鱗茎)はとても苦く食用には不向きだが、生の根を砕いて潰したものを打撲や捻挫の患部に湿布剤として用いていた。湿布剤は膏薬(コウヤク)といい、小麦粉とハイリ(酢)を入れて練ったものを腫れた部分に厚くおき白い布で巻き付けていた。家の中においが充満してたまらなかった記憶がある。

**ナンゴククサスギカズラ**

(ダチュウンティイ) *Asparagus cochinchinensis (Lour.) Merr.*

**ユリ科。** 南国草杉蔓。海岸のサンゴ礁



テッポウユリ (リュウキュウユリ)  
*Lilium longiflorum Thunb.*



ナンゴククサスギカズラ  
*Asparagus cochinchinensis (Lour.) Merr.*



ニイタカヨモギ *Artemisia campestris L.*



シマヤマヒハツ *Antidesma montanum Blume*

の岩場や砂質の草地などに自生。道路が整備される前には石垣や福木の根でふさがれたクサスギカズラが、イモ(根茎)の頭を半分出したものによく出会った。与那国島では「飢餓のイモ」の意をもつ「ダチュウンティイ」と呼び、食糧難の時に滋養強壮剤として根茎を煎じて薬にした。紡錘状の根茎は束生し、砂地だと長さ20cm、径2〜3cmまで太くなる。5月頃から葉腋に乳白色の小花が咲き、7月には赤く熟した球果となる。果肉を剥がして砂地に播く。イモはいったん蒸して天日干しにしてサラダや酢漬けなどに利用する。

**ニイタカヨモギ (リュウキュウヨモギ、ハママーチ、インチングサ)**

*Artemisia campestris L.*

**キク科。** 八重山ではリュウキュウヨモギと言うほか、横に這っている姿が松の枝に似ることからハマ(浜)マーチ

(松)とか、近縁種のカワラヨモギの生薬名、茵陳蒿インチンコウ)からインチングサとも呼ばれる。砂浜を好んで自生する。フーチーバーに似た若干の香りとほろ苦さはあるが、ニシヨモギほど苦味はない。また葉は無毛でみずみずしくサラダなどでも美味である。

**ハマゴウ (シダツ)** *Vitex rotundifolia L.f.*

**シソ科。** 浜栲。本州以南に自生。与那国ではシダツと呼び、砂浜に広がり、枝葉を踏むと清涼感のある独特な香りがする。ハマゴウは単葉だが、近縁のミツバハマゴウは3葉の、ヤエヤマハマゴウは5葉の複葉。伝承では、関節の痛み、神経痛、皮膚病などに葉を煎じて患部に湿布する。また茎葉をいぶして虫除け使われるほか、沖縄線香にも用いられてきた。中薬では果実の陰干ししたものを蔓荊子(まんけいし)、茎葉の陰干ししたものを蔓荊葉(まんけいよう)という。花をサラダに、若葉に辛味があり魚料理に未熟果をつぶしてカレーのスパイスに用いる。

**シマヤマヒハツ (ヤモミ、ダマサン)**



ハマゴウ *Vitex rotundifolia L.f.*

**Artidesma montanum Blume**  
**トウダイクサ科。** 葉の形状はヒハツモドキに、房状につく実はコシヨウに似る。石垣でヤモミ、与那国でダマサン(ダマは山、サンは酸っぱい)の意と呼ぶ。海岸近くの原野や山に自生。雌雄異株で雄花は香りがあるが実はない。丈夫で実を沢山つけるので繁盛を願って生け垣などにする。熟した実を果実酒やジャム、パン生地。強い酸味と濃紫色は魅力的だ。渋みもあり媒染なしで紫に染色可能。